

国立歴史民俗博物館における戦争展示をめぐる

国立歴史民俗博物館

一ノ瀬俊也

1. 本稿の課題

国立歴史民俗博物館（以下歴博）は日本唯一の国立の歴史博物館として開館、20年以上が経過しながら、本格的な昭和期、そして近代日本の戦争に関する展示が行われることがなかった。しかし戦後60年以上が経過してようやく「先の戦争の時代」が学問研究の対象として定着、多くの成果が生まれつつある現状をふまえ、歴博においても1930年代～戦後の高度成長期までをあつかう常設展示（第6展示室）の準備が本格化してきた。

以下本稿では、そうした歴史博物館における〈戦争〉の展示がいかに取り組まれているのかを述べ、読者諸賢の参考に供したい。以下はすべて筆者個人の意見であり、歴博のそれとは無関係であることを最初にお断りしておく。

2. 戦争展示の前身

歴博のオープンは1983年である。このときは第1（考古・古代）・第2展示室（中世）までが公開された。開館当初から戦時期～戦後を対象とした展示名として「戦争と平和」「戦後の生活革命」が考えられていたにもかかわらず、それが具現化されることはなかった。そもそも幕末維新期～昭和初期（満州事変勃発より前）を対象とする現在の第5展示室のオープン自体が遅れに遅れ、前半の「文明開化」が1993年に、後半の「産業と開拓」続いて「都市の大衆の時代」が95年に至ってオープンした。

その間に、本来であれば近代が入るはずであった第4展示室には民俗の展示が入り、近世（第3展示室）→民俗（第4展示室）→近代（第5展示室）という、歴史の連続性という観点からすれば、いささ

か違和感のある順番となってしまうている。

なぜ近代の展示が遅れたのかといえ、それは「戦争」をどう扱うかについての意見が定まらなかったからである。歴博のオープンには先に述べたとおり83年であるが、それはいわゆる教科書問題の発生とまさに同時期であった。そのため歴博における歴史展示の基調は「民衆生活史」におかれ、民衆の生活に関する歴史上の諸資料は多数展示されていても、権力史・政治史に関する展示は藤原道長などの例外を除けば驚くほど少なく、排除されているといっても過言ではない。信長や秀吉、家康が出て来ることはないのである。

話を戦争展示に戻そう。第5展示室においても、戦争の問題は結局全く出てこない。日清戦争も、日露戦争も全く扱われていない、見る人によっては一種異様な展示なのである。確かに第5展示室では被差別部落の問題、アイヌ人や関東大震災時の朝鮮人虐殺を正面から取りあげるなど（前者の問題は、第1室～第4室ではほとんど取りあげられなかった。いわゆる社会史研究の興隆により、とくに中世史・近世史の分野においてはかなりの進展があったはずだと思うが）、歴史の暗部にも目を向けた意欲的なものだったにもかかわらずである。

1997年、筆者が歴博に助手として採用されたとき、当時の近現代史担当の上司に「なぜ戦争を扱わなかったのですか」と素朴な疑問を呈したところ、返ってきたのは「あの時はそんなこと言い出せる空気ではなかった」という返事であった。筆者もなんとなく得心してしまったが、いずれにせよ関東大震災時になぜ多くの朝鮮人が日本の内地にいたのか、という問いにわかりやすく答える展示には残念ながらなっていない。幸か不幸か、外部からそのことへの強い抗議が寄せられることもなかった。

ただいま「得心してしまった」と述べた。それは、

博物館においてある展示がないのもひとつの「展示」だと思ったからである。つまり、戦争の問題はいまだ国立の博物館における「展示」の対象にはできない、大向こうの納得しうる評価がいまだ定まっていない問題なのだ、のだと。

しかし戦争展示実現への追い風は、思わぬ方向から吹いてきた。2004年の国立大学と、その一種である大学共同利用機関の独立行政法人化である。歴博の位置について正確に言えば、それまでの文部科学省直属の機関から、「大学共同利用法人間文化研究機構」傘下の一機関への移行である。独法化の主眼は、数年間にわたる、いわゆる「中期計画」「中期目標」の樹立と計画終了時の達成度調査、およびその予算への反映にある。

ちょうどそのころ、歴博では第二期展示リニューアル構想にしたがって中世史のリニューアルが完了し、近世史のリニューアルへの取り組みが進んでいたときであった。この中期計画の目玉として、第6展示室の実現が浮上したのである。

いやしくも国立の博物館の展示が設立当初の目標であった高度成長まで完結していないのは誰の目にも不自然であり、それを完結させるのを目標とする、というのは実にわかりやすい話である。だから、第6展示室の完成は、第1次の中期計画が完結する2009年度内と定められたのである。

3. 佐倉連隊への着目

歴博の展示は、数年間の「共同研究」の成果を一般に公開するという名目で行われる。実際、筆者が歴博に赴任する以前から多くの共同研究がおこなわれてきた。基幹研究「人類にとって戦いと」のB班として「近現代における兵士の実像」（研究代表者・藤井忠俊氏）が1996年にスタートし、主に大阪真田山陸軍墓地と岩手県北上市の軍事郵便を対象とする5年間の研究が終了、2003年に『村と戦争』『慰霊と墓』と題する2冊の報告書も刊行された。

さらに、筆者の上司の教員が毎年市場から戦争に関する資料を一定数購入する事業を継続していたので、歴博には一定数の「近代戦争関係資料」「戦時期生活関係資料」というコレクションが蓄積されるに至っていた。それぞれ本項執筆の時点で約8800点、1600点に達している。

購入であるから特定の地域・時代を中心としたも

のではない。また、その資料の背景、元の所有者に関する情報が必ずしも十分に得られない、という限界があるのは事実である。ただ、だから市場に出ている資料は博物館の展示には適さないのだ、という声には筆者は与しない。それは、世代交代が進む中であまりに多くの資料が市場での売買という場ですでに出てしまっているという目の前の現実を目をつぶり、かつそうした資料であっても、それらに何をどこまで語らせるかこそが、研究者の腕の見せ所であるということを忘れた意見であるからだ。これらの蓄積を用いて第6展示室——戦争展示はなされるのだと、少なくとも筆者は思っていた。

ところが、突然というべきか、歴博の第6室展示は地元の、まさに国立歴史民俗博物館が建っている地にかつて存在した歩兵第二・第五十七連隊を対象としたものにする、については常設展示前に共同研究を行ってその成果を特別企画という期間限定の展示として公開する、観客からの意見・感想をふまえて修正すべきところは修正し、再構成して常設展示（第6展示室の前半）とする、という大方針が上から示されたのである。

率直に言って、この大方針にはいささかとまどった。佐倉連隊について何か研究なり資料の蓄積があったというわけではなかったからである。展示する資料がないのとにかく展示をするというのは、補給の見込みがないのに戦争をするのと同じくらい無謀である。なぜ地元の連隊の研究をしていなかったのかと言われればそれまでであるが、研究にはある程度達成の見込みというものが必要である。そうした意味でのテーマ選定を、それまでの歴博は各教員の自発性・主体性にゆだねてきたはずであった。さらに、どこの地方でもそうだが、各連隊の公文書は敗戦時に焼却されてほとんど残ってはいないし、佐倉市にも千葉県にも公立の歴史系博物館がなく、したがって千葉県に関する郷土資料の蓄積も行われてはこなかった。そうした問題も、佐倉連隊というテーマに対して感じた不安と若干関わる。

しかし、上からの命令であるから、筆者が歴博の教員である限りは、1944年、レイテ行きを命じられた佐倉連隊と同じように死守しなくてはならない。

4. 展示の準備と構成

個別共同研究「佐倉連隊と地域民衆」が3年間の

研究を経て終了するとともに、特別企画「佐倉連隊にみる戦争の時代」展示プロジェクト委員会が発足した。なお、共同研究の成果は『国立歴史民俗博物館研究報告 佐倉連隊と地域民衆』として本年刊行された。

2年間の準備期間の間にも、さまざまな困難やトラブルがあったが、ここでは書かない。結果として2006年7月4日にオープンした展示（会期は同年9月3日まで）は、大きくわけて4部構成となる。各部とも担当の教員があり、筆者の担当は「Ⅲ 佐倉連隊と地域」である。以下、各部ごとに概要を述べる。先に歴博広報誌『歴博』136号に筆者が記したものを、一部加筆修正した。

Ⅰ 佐倉城から佐倉連隊兵営へ

歴博の建設時に、佐倉城址の発掘調査が行われ、佐倉城ならびに連隊遺構に関する多くの知見が得られた。その成果を生かしつつ、江戸時代の佐倉城が明治の兵営へとどのようにして変化をとげていったのかを考古学・建築史学の立場から明らかにする。明治期の連隊全景の復元模型をもちいて当時の連隊の有りさまを視覚的に示すとともに、日本の各地域に建設された兵営との比較を行う。また、近年注目を集めている近代考古学の成果についても紹介する。

Ⅱ 佐倉連隊の兵営生活

近代の人々は、普通の若者から兵士へとどのようにして作り替えられていったのか。その過程を、千葉県内の徴兵検査や佐倉連隊で行われた軍隊教育、兵営生活に関するさまざまな資料を用いてときあかす。昭和初期の兵舎復元模型をはじめとする多数の佐倉関係写真資料などとともに、兵士たちが暮らしていた部屋（内務班）の一部の復元、兵士たちが食べていた兵食の復元模型などを展示する。

Ⅲ 佐倉連隊と地域

戦前の佐倉の町は、連隊と非常に深いつながりをもっていた。単に近隣の若者を兵士として送り出すというだけでなく、多くの商店が連隊相手の商売をすることでなっていた。聞き書き調査の成果を用い、連隊と佐倉の町の関係のありかたを示す。兵士の故郷ではどのように兵士たちを送り出したり、死んだ兵士を弔っていたりしたのか、どんな手紙を戦地の兵士とやりとりしていたのかなど、近代の

人々が戦争とどうかかわっていたのかという問題にもせまる。

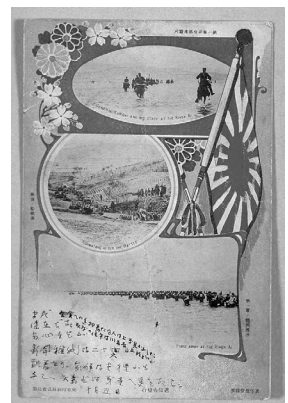
Ⅳ 佐倉連隊と戦争

佐倉連隊は日本でもっとも歴史の古い連隊の一つとして西南戦争、日清・日露戦争、さらには太平洋戦争に参加して戦争末期のフィリピン・レイテ島で壊滅するなど、近代日本の戦争を考えるうえで重要な位置にある。連隊が参加した戦争の実相を、あくまで厳密な考証にもとづくモノ・写真・各種統計資料などから明らかにする。レイテ島などの復元模型を展示し、わかりやすく戦場の実相を学ぶ。

以上の紹介文の末尾に、筆者は「はなはだ簡単な紹介ですが、本展示の趣旨は、近代日本の軍隊・戦争の実態をわかりやすく、しかし正確に示し、改めて過去の戦争による犠牲の大きさ、平和の尊さについて思いを深めること、この一点にあります。多数のご来館をお待ちしております」と述べた。正直にいうと、戦争の展示にどんな反響があるのか予想できなかったからであり、なぜ佐倉なのかがやはりよく理解できなかったからである。

事実、展示のオープン前には「なぜ国立の博物館が軍隊を展示するのか」という電話が館にあったと聞いている。どうも「軍を取りあげる＝戦争賛美である」との発想があるらしく、電話に出た人はそのような意図はないと説明したそうだが、いずれにせよ「なぜ戦争を展示するのか」の説明からはじめなければならなかった。そのとき筆者は、上記のような“ありきたりの”説明しかできなかったことを告白しなくてはならない。本稿が公開されるころには、展示は終了してしまっているから詳細は展示図録を参照されたい。品切れでない限り、歴史博物館振興会で通販可能である。詳しくは<http://www.rekishin.or.jp/tuuhan.htm>を参照されたい。

展示には、諸外国や思想団体の抗議も予想されるというので、研究部の関係教員と管理部（事務）



軍事郵便



共同託児所（上）、共同炊事（下）

から各1名が毎日交代で常駐してクレームに対応することになった。それらの対応は展示開催間近になってあわただしく決まり、オープンの日を迎えたのである。

5. 展示の問題点と今後への展望

本稿を執筆している7月中旬の時点で、幸いというべきか、大きな問題は発生していない。観客は筆者が見た限りではやはり年配の方が多い。思い出話を語り合いながら資料を食い入るように見ている姿もたびたび見かけた。体験コーナーとして三八式歩兵銃の重さを体感できるコーナーなどを作ったが、今のところ「子どもに銃を持たせるな」といった不評の声は出ていない。

先に実物資料の量が不安だと述べたが、結局、一定の量を得て展示場に陳列することができた。その中には「個人蔵」とキャプションの付けられた、筆者の私物も多数混じっている。

特に近代史では、古代・中世史と違って金額は小さいけれど学術的には重要な資料がそのへんの古本屋でほんとに売られていることが多いが、そうした資料は実は歴博では買えないのである。なぜかといえば、歴博が資料を購入するときは監査会という名の審査にかけ、代金の支払いは各年度の末まで延びるからで、これでは売り主は他の誰かに先に売ってしまうだろう。何とかしたいが、なにぶん公金がからむことなのでどうにもならない。結局自腹を切ることになるが、自腹である以上、それは私物に過ぎないから、なにかの機会に筆者が館を辞めるときには一緒に持って出ざるを得ない。

観客の方々には、アンケートをとって感想を書い

てくださるようお願いしている。そこには厳しい意見も散見される。佐倉連隊に関する資料を漫然と並べただけではないか、というのがあった。

確かにその通りであると言わざるをえない。この問題は、展示の構成の適否に深く関わっているのだ。例えば中国大陆から千葉県に宛てて出された一通の軍事郵便を展示したいとする。それは展示の構成上、筆者担当の「Ⅲ 佐倉連隊と地域」におくことになるのだが、郵便を出した兵士が戦っている戦争の過程は「Ⅳ 佐倉連隊

の戦争」で扱われている。民衆の生活史という観点からすれば、戦場の兵士と銃後の家族とは同じ位相で捉えられねばならないのに、銃後と戦場とで展示室が違ってしまっているために、観客の統一的な把握は困難になってしまっている。この事実は、まことに遺憾ながら、展示の基本構想づくりの際、いくら「戦局史」だけを叙述したところで、それだけでは「戦争の時代」の総合的な叙述にはなり得ない、もっとわかりやすいえば戦場で死んだ敵味方の兵士には妻も子もあったのだ、という初歩的な認識というか、想像力がなかったことを意味している。

この点は以前から予想できていて、筆者は展示構成はたとえ新味がないといわれてもいいから、日清・日露戦争→日中戦争→太平洋戦争といった時系列順にした方がいいのではないかと意見具申したのだが、受け入れられることはなかった。このほかにも、第Ⅳ部には、「個々の戦局の様子はよくわかるが、なぜ日本がこれだけ戦争をくり返したのかについての説明がない」といった本質的な批判があり、来るべき第6展示室ではなんとか改善したいと考えている。

このほかにも、字が多い、資料が小さくて見えづらいなどの細かい、しかし実際にやってみないとなかなか得られない貴重な意見が寄せられている。もはや後戻りはできないから、こうした教示に学びつつ、第6展示室実現では研究者の独りよがりにならずにわかりやすい、しかし質の高い展示を目指したいと願っている。そのため、現在外部の有識者に依頼して第6室リニューアル委員会（ほんとうはリニューアルではなく、ゼロからの新造なのだが）を作って、おおむね月1回程度の内容検討会議を実施中である。

2006年(平成18年)7月4日(火)～9月3日(日)

会場：国立歴史民俗博物館 企画展示室

開館時間：9時30分～17時00分(入館は16時30分まで)

休館日：7/10(月)・18(火)・24(月)・31(月)、8/7(月)・21(月)・28(月)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館

National Museum of Japanese History

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地 Tel.043-486-0123(代表)

入館料：一般830円(560円)／高校・大学生450円(250円)／小・中学生250円(130円)

※()内は20名以上の団体 ※常設展示もご覧いただけます。

●お問い合わせ／ハローダイヤル03-5777-8600(7:00～23:00年中無休)
れきはくホームページ／<http://www.rekihaku.ac.jp>

▼1943年 東京から佐倉に移転してきた近衛歩兵第五連隊



▼佐倉に凱旋した歩兵第五十七連隊の戦死者追悼式
1996年11月2日



▼佐倉での軍旗祭



▼佐倉兵營之図(1889年発行)



アメリカ軍作成のレイテ戦地図 1944年



▼佐倉兵營及近衛団本部之図(1889年発行)



◀除隊記念の盃



▲佐倉の町を馬で行く高級将校